

# 津古東宮原遺跡 7

小郡市文化財調査報告第342集

2021

小郡市教育委員会



## <序 文>

本書は小郡市津古東宮原遺跡7次調査の発掘調査報告書です。本遺跡が所在する小郡市北部の丘陵部は、これまでの調査で、弥生時代の集落や古墳時代の集落が展開していたことが明らかになっています。

今回の調査でも、弥生時代の集落や奈良時代の集落の様子が明らかになりました。

調査にあたりましては、関係諸機関、周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様などのご理解とご協力をいただきました。記して感謝を申し上げ、序文といたします。

令和3年3月31日

小郡市教育委員会 教育長 秋永 晃生

## <例 言>

1. 本書は、令和元年度に行った小郡市津古に所在する「津古東宮原遺跡7」の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、有限会社ビサイから委託を受け、小郡市教育委員会が実施した。
3. 調査期間は、令和元年5月29日から令和元年10月1日まで実施した。調査面積は、604.09㎡である。
4. 遺構の実測は担当者のほか、一木賢人、久住愛子、宮崎美穂子、福岡大学学生川波亜衣、遺物の実測は林知恵、デジタルトレースは、宮崎美穂子が行った。遺物の洗浄・接合は佐々木智子、永富加奈子、山川清日、牛原真弓が行い、遺物の撮影は（有）システム・レコに委託した。
5. 本書中の方は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に拠る。
6. 本書で用いた標高は、東京湾平均海面（T. P.）を基準とした。
7. 本書で用いた略号は、住居跡：SC 土坑：SK 溝：SDである。
8. 遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。
9. 本書の執筆と編集は山崎頼人が行った。

## <目 次>

第1章 調査の経過と組織 .....	1
1. 調査に至る経緯 .....	1
2. 調査の経過 .....	1
3. 調査組織 .....	1
第2章 位置と環境 .....	2
第3章 I区の調査 .....	4
1. 調査の概要 .....	4
2. 弥生時代中期から古墳時代前期の遺構と遺物 .....	4
3. 古墳時代後期から奈良時代の遺構と遺物 .....	20
第4章 II区の調査 .....	27
1. 弥生時代中期から古墳時代前期の遺構と遺物 .....	27
2. 古墳時代後期から奈良時代の遺構と遺物 .....	32
第5章 調査成果のまとめ .....	35

## < 挿 図 ・ 表 目 次 >

第1図	津古東宮原遺跡周辺遺跡分布図 (s=1/25,000) .....	3
第2図	津古東宮原遺跡調査区位置図 (s=1/2,500) .....	3
第3図	津古東宮原遺跡7全体図 (s=1/200) .....	5・6
第4図	I区1・2・4号住居跡 実測図 (s=1/40) .....	7
第5図	I区3・7号住居跡 実測図 (s=1/40) .....	9
第6図	I区6・8号住居跡 実測図 (s=1/40) .....	10
第7図	I区10号住居跡 実測図 (s=1/40) .....	11
第8図	I区12・13号住居跡 実測図 (s=1/40) .....	13
第9図	I区14・16号住居跡 実測図 (s=1/40) .....	14
第10図	I区18号住居跡 実測図 (s=1/40) .....	10
第11図	I区住居跡出土土器実測図① (s=1/4) .....	16
第12図	I区住居跡出土土器実測図② (s=1/4) .....	17
第13図	I区1・6号土坑 実測図 (s=1/40) .....	18
第14図	I区土坑・溝出土土器実測図 (s=1/4) .....	19
第15図	I区9号住居跡 実測図 (s=1/40) .....	21
第16図	I区住居跡出土土器実測図③ (s=1/4) .....	22
第17図	I区2・3・4・7号土坑 実測図 (s=1/40) .....	23
第18図	I区8・15号土坑 実測図 (s=1/40) .....	24
第19図	I区土坑出土土器実測図 (s=1/4) .....	25
第20図	I区出土石器・鉄器・土製品ほか実測図 (s=1/2、11~14・18はs=1/4) .....	26
第21図	II区1・2号住居跡 実測図 (s=1/40) .....	28
第22図	II区3号住居跡 実測図 (s=1/40) .....	29
第23図	II区住居跡出土土器・石器・鉄器・土製品実測図 (s=1/4、11・12はs=1/2) .....	30
第24図	II区2・3号土坑 実測図 (s=1/40) .....	31
第25図	II区1・4号土坑 1号溝 実測図 (s=1/40) .....	33
第26図	II区土坑・溝出土土器実測図 (s=1/4) .....	34
第27図	津古東宮原遺跡7変遷図① .....	36
第28図	津古東宮原遺跡7変遷図② .....	36
第29図	津古東宮原遺跡7変遷図③ .....	37
第30図	津古東宮原遺跡7変遷図④ .....	37
第1表	津古東宮原遺跡7出土土器観察表 .....	38

## <図 版 目 次>

- 図版1 津古東宮原遺跡7 I区南側調査区全景 津古東宮原遺跡7 I区北東側調査区全景  
図版2 津古東宮原遺跡7 I区北側調査区全景  
図版3 津古東宮原遺跡7 II区調査区全景① 津古東宮原遺跡7 II区調査区全景②  
図版4 ①I区1号住居跡 ②I区1号住居跡ミニチュア土器出土状況 ③I区2号住居跡  
④I区2号住居跡土層断面 ⑤I区3号住居跡 ⑥I区3号住居跡土器出土状況  
⑦I区3号住居跡貼床除去後 ⑧I区6号住居跡  
図版5 ①I区6号住居跡 ②I区6号住居跡全景 ③I区7号住居跡 ④I区8号住居跡土層断面  
⑤I区8号住居跡柱穴検出 ⑥I区9号住居跡土層断面 ⑦I区10号住居跡 ⑧I区12号住居跡  
図版6 ①I区13・14号住居跡 ②13号住居跡中央土坑土層断面 ③I区16号住居跡  
④I区1号土坑土層断面 ⑤I区1号土坑完掘 ⑥I区2号土坑土層断面  
⑦I区3号土坑土層断面 ⑧I区3号土坑完掘  
図版7 ①I区4号土坑 ②I区6号土坑土層 ③I区6号土坑土器出土状況 ④I区7号土坑  
⑤I区8号土坑 ⑥I区15号土坑 ⑦I区15号土坑完掘 ⑧I区3号溝土層断面  
図版8 ①II区1号住居跡 ②II区1号住居土器出土状況 ③I区1号住居水晶出土状況  
④水晶出土状況詳細 ⑤II区2号住居跡 ⑥II区3号住居跡土層断面 ⑦II区3号住居跡  
⑧II区3号住居遺物出土状況  
図版9 ①II区1号溝土層 ②II区1号土坑土層 ③II区1号土坑完掘 ④II区2号土坑土器出土状況  
⑤II区3号土坑土器出土状況① ⑥II区3号土坑土器出土状況② ⑦II区4号土坑土層  
⑧II区5号土坑完掘  
図版10 I区1・2・3・9・10号住居跡出土土器  
図版11 I区10・12号住居、6号土坑出土土器  
図版12 I区6・8・15号土坑出土土器  
図版13 I区8・15号土坑出土土器  
図版14 I区15・3号土坑、II区3号住居跡出土土器  
図版15 II区2・3・4号土坑出土土器 各遺構出土石器  
図版16 石製武器類 石斧類  
図版17 石製取糧具 土製品  
図版18 砥石各種  
図版19 鉄製品 鉄滓

# 第1章 調査の経過と組織

## 1. 調査に至る経緯

本発掘調査は7次調査となる。平成30年1月24日付で照会文書（事前審査番号17145）が提出され、2月2日に申請地の試掘調査を実施した。その結果、開発予定地の広範囲に弥生時代と奈良時代の遺構が存在することが明らかになった。これにより、開発前に発掘調査が必要な旨を伝え、その後協議を重ねた。協議の結果、宅地造成の道路部分604.09㎡の調査を実施することになり、令和元年5月16日付けで委託契約を締結した。現地の発掘調査は令和元年5月29日に開始し、令和元年10月1日に終了した。

## 2. 調査の経過

調査日誌より抜粋し、調査経過を記す。

2019年5月29日 表土剥ぎを行う。まずⅠ区から進める。南側は地山がわかるが、北側ははっきりしない。ただ、古代遺物を大量に包含しているため、一度床土下で検出を行い判断する。

- 6月4日 とても湿度が高い。本日までではⅠ区西側検出済。
- 6月11日 三国中学生4名職場体験。
- 6月19日 SC08は建て替え有りのため、一度検出状態で写真撮影。
- 6月21日 晴れのため、寒冷紗設置。中央部SC検出。
- 6月24日 SC01から06まで個別図作成。
- 6月25日 SK06より管玉出土。
- 7月1日 座標移動。
- 7月4日 かなり水が溜まっていたので北側調査区の新規検出をかける。
- 7月9日 愛知県より石黒立人氏来跡。
- 7月21日 豪雨、朝から警報、避難情報のため、水抜き実施。一部調査区からオーバーフロー有り。
- 7月24日まで継続してポンプによって水抜きをしているがなかなか水が引かない。
- 7月24日 Ⅱ区機械掘削。
- 8月23日 秋雨前線が活発に。
- 8月26～29日 福岡県に大雨特別警報。
- 8月30日 一日水抜き。
- 9月2日 雨
- 9月3日 ようやく現場再開。水抜きとⅡ区の再検出。
- 9月24日～ 平板実測、個別図作成。
- 9月26日 調査区埋め戻し開始。
- 10月1日 現地調査完了。

## 3. 調査組織

### 【令和元年度調査 令和2年度整理作業】

小郡市教育委員会	教育長	清武 輝	(令和元年9月まで)
		秋永 晃生	(令和元年10月から)
	教育部長	黒岩 重彦	(令和2年3月まで)
		山下 博文	(令和2年4月から)
文化財課	課長	柏原 孝俊	
	係長	杉本 岳史	
	技師	山崎 頼人	

## 第2章 位置と環境

本遺跡は筑後平野と福岡平野を繋ぐ二日市地狭帯の西側にあたり、九千部山に連なる基山の東側に広がる独立丘陵である三国丘陵の北西部に立地する。小都市を南北に貫流する宝満川水系の宝珠川南岸の丘陵上に立地する。丘陵地からその河川へなだらかに地形が傾斜しており、その地形変換点に位置する。

津古東宮原遺跡の調査はこれまで6次にわたって行われている(第2図)。

1次調査は、昭和57年度に県道筑紫・東福童線建設に伴い実施し、弥生時代中期初頭から前半の甕棺墓12基、奈良時代の住居跡1軒が検出された。

2次調査は、昭和63年度にガソリンスタンド建設に伴って調査を実施し、弥生時代中期初頭から前半、後期前半から中頃、古墳時代後期の居住関連遺構が検出された。

3次調査は、平成3年度に都市計画街路県道原田駅大崎線工事に伴って調査を実施し、縄文時代前期の土坑、弥生時代後期前半住居跡、古墳時代前期と後期住居跡、奈良時代掘立柱建物跡が検出された。

4次調査は、平成4年度に都市計画街路県道原田駅大崎線工事に伴って調査を実施し、縄文時代前期の土坑、弥生時代中期、後期の住居跡、古墳時代前期、後期の集落、中世の土壇墓が検出された。

5次調査は弥生時代中期、古墳時代前期の土坑が調査された。

6次調査の調査区は7次調査と近接している。弥生時代中期初頭から後期後半の住居跡、古墳時代後期の住居跡が調査された。弥生時代の集落は特に中期前葉から中頃を主体としている。

また、遺跡の西側低地部では津古高田遺跡で弥生時代中期とみられる水田遺構も調査されている。

遺跡の名称は、従前の津古東宮原遺跡(第1図4)の調査内容と地形的なまとまりでくられているが、大きくは現在「みくにの団地」となっている津古遺跡群の一角を占める遺跡である(第1図)。津古遺跡群は、昭和43年に宅地造成の際に緊急調査され、弥生時代前期の袋状堅穴、弥生時代後期の住居跡、古墳時代前期の前方後円墳(津古1号墳)、方墳(津古2・3号墳)が調査された。

津古遺跡群周辺の丘陵地帯は、三国丘陵とよばれ、弥生時代前期～中期を中心とする集落遺跡の多く分布する箇所である。これらの津古・三沢遺跡群のひろがり東西1.5km、南北2kmにおよび、当地域や北部九州における農耕集落の発展過程と集落動態を知る上で極めて重要な情報を提示してくれる。三国丘陵は、筑紫野市域に広がる限・西小田遺跡群(第1図18・19)の膨大な遺構や遺物も含まれており、総合的な評価が待たれる。

### [参考文献]

波多野暁三1975「10 津古遺跡群」『筑紫史論』第3集

小都市教育委員会1983『津古東宮原遺跡』小都市文化財調査報告書第18集

小都市教育委員会1990『津古東宮原遺跡Ⅱ』小都市文化財調査報告書第60集

小都市教育委員会1993『津古遺跡群Ⅰ(津古東宮原遺跡Ⅲ区)』小都市文化財調査報告書第84集

小都市教育委員会1994『津古遺跡群Ⅱ(津古東宮原遺跡Ⅳ区)』小都市文化財調査報告書第92集

小都市教育委員会2006『津古東宮原遺跡Ⅵ』小都市文化財調査報告書第210集

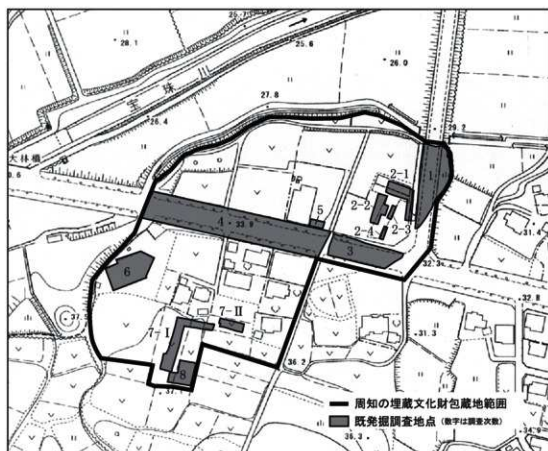
小都市教育委員会2015『埋蔵文化財調査報告書6(津古東宮原遺跡Ⅴ)』小都市文化財調査報告書第287集

筑紫野市教育委員会1993『限・西小田地区遺跡群』筑紫野市埋蔵文化財調査報告書第38集





第 1 図 津古東宮原遺跡周辺遺跡分布図 (s=1/25,000)



第 2 図 津古東宮原遺跡調査区位置図 (s=1/2,500)

## 第3章 I区の調査

### 1. 調査の概要

本遺跡はこれまでに6次の調査を実施している。周辺でも確認されている弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が調査区近辺にも広がりを持っていることが分かった。また、住居自体は今回検出されていないが、奈良時代の廃棄土坑や溝の存在からうかがえる集落が調査区近辺に広がる事が分かった。遺跡内には埋積谷があり、谷がある程度埋まった段階で、集落が広く展開するようである。

I区は、「津古東宮原遺跡VI」調査区と近接し、その丘陵側に位置する。主に弥生時代の集落と奈良時代の集落が広がっていた。

調査地は畑として緩やかな段造成がされており、その上に耕作土がのっている。特に標高の高い南側では削平が顕著で、検出した住居跡も床面が残っているというよりも、下層での検出になっている。標高の低い北側には2次堆積した土壌が検出面となり、遺構の検出が難しかった。

検出した遺構は、縄文時代の土坑1基、弥生時代中期から古墳時代前期の住居跡18軒、土坑6基、溝2条、奈良時代の住居跡1軒、土坑8基、溝2条などであった。大きく、古墳時代前期までの遺構と奈良時代以降の遺構とに便宜上分けて報告する。

### 2. 弥生時代中期から古墳時代前期の遺構と遺物

#### (1) 住居跡

##### 1号住居跡 (第3・4図、図版4)

I区南端に位置する。かなり削平を受けており貼床下層での検出と考えられる。4号住居跡と別遺構として調査したが、1号住居のベット状遺構である可能性も考えられる。南から東辺は調査区外に及ぶ。長軸3.76m以上、短軸3.08m以上の長方形を呈し、検出面からの深さは、最大で6cmである。中央の炉とその両側に主柱を持つと考えられ、P1が北側の主柱である。主軸は北西-南東方向である。

##### 出土遺物 (第11図、図版10)

弥生土器壺口縁部(1・2)、弥生土器高坏脚部(3)、弥生土器坏(4)、弥生土器器台(5)、ミニチュア土器(6)が出土した。壺口縁部(2)はP1、高坏脚部(3)は炉、坏(4)はP4から出土した。ミニチュア土器(6)は鉢形で床面直上に近いレベルから出土した。

##### 2号住居跡 (第3・4図、図版4)

I区南端に位置する。かなり削平を受けており、東側は調査区外に及ぶ。南北3.84m、東西2.32m以上の方形を呈し、検出面からの深さは5cm程度であった。埋土は主に黒褐色土である。中央に細長い炉を持っており、主柱は4本かと思われる。調査区内では西側の2柱穴を確認した。南西の柱は新しい時期の柱穴に切られているが、下端は残存していた。主軸は北北東-南南西である。床面から土器片が多く出土している。

##### 出土遺物 (第11図、図版10)

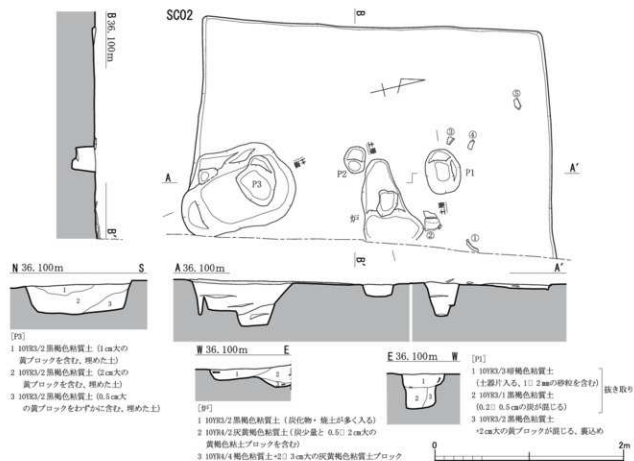
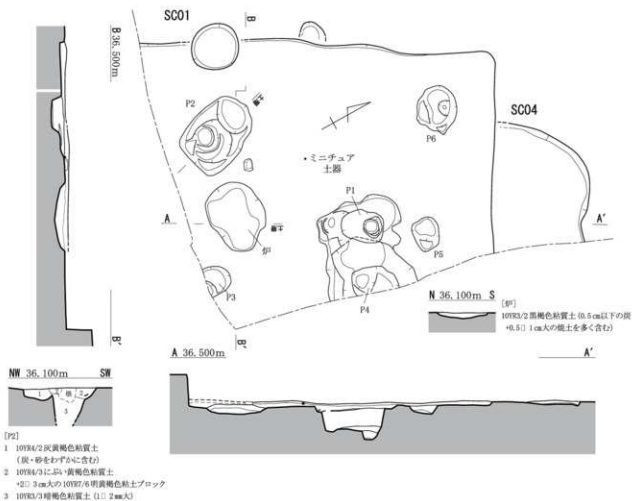
弥生土器壺口縁部(7~9)、弥生土器壺口縁部(10~12)、弥生土器壺底部(13)、弥生土器器台(14)が出土した。壺口縁部(12)は床面①、壺口縁部(9)は床面③、器台(14)は床面④の位置から出土した。壺口縁部(8)は炉、壺口縁部(11)はP1、底部(13)はP2から出土した。

##### 3号住居跡 (第3・5図、図版4)

I区南端に位置する。かなり削平を受けており、北東隅は調査区外に及ぶ。6号住居・8号住居を切っている。南北3.6m、東西3.56mのほぼ正方形を呈し、検出面からの深さは5cm程度であった。埋土は主に黒褐色土である。中央に隅丸方形の炉を持っており、主柱はその両側にみられる2本かと思われる。4隅にはやや浅い掘り込みを有しており、北東隅の掘り込み内からは高坏坏部(第11図18)がほぼ正位で据えられた状態で出土した。主軸はほぼ南北方向である。6cm程度の貼床層がみられ、下層からビット等が

折込 A 3

折达 A 3



第4図 I区1・2・4号住居跡 実測図 (s=1/40)

検出された。

#### 出土遺物 (第11図、図版10)

弥生土器甕口縁部 (15・16)、弥生土器甕底部 (17)、弥生土器高坏坏部 (18)、弥生土器器台 (19) が出土した。(19) は炉から出土した。

#### 4号住居跡 (第3・4図)

I区南端に位置する。1号住居跡の北側に位置する。上部をかなり削平されており、深さ数センチの残存である。やや丸みを帯びた上端ラインで、もともとの形状は示していないと思われる。1号住居のベッド状遺構部分である可能性も考えられる。

#### 出土遺物 (第11図)

弥生土器甕口縁部片 (20) が出土した。

#### 5号住居跡

欠番である。6号住居北側で別の住居 (5号住居跡) を想定して調査した。6号住居と床面がほぼ同じレベルであり、調査区内では小面積の調査であり、不明な点も多いことから、6号住居と同様のものとした。

#### 6号住居跡 (第3・6図、図版4)

I区南端に位置する。かなり削平を受けており、西側は調査区外に及ぶ。北側を3号住居跡に切られている。東西3.72m以上、南北5.2mの長方形を呈すると考えられ、検出面からの深さは、最大で12cmである。中央の炉とその両側に主柱を持つと考えられ、P1が東側の主柱である。主軸は北北西-南南東方向である。

#### 出土遺物 (第11図)

弥生土器甕口縁部片 (21)、弥生土器甕底部 (22) が出土した。

#### 7号住居跡 (第3・5図、図版5)

I区中央付近に位置する。かなり削平を受けており、東側は調査区外に及ぶ。11号住居を切っている。東西1.36m以上、南北2.4mの方形を呈し、検出面からの深さは、6cm程度である。柱穴がみられるが、主柱構造は不明である。主軸はほぼ南北方向である。

#### 8号住居跡 (第3・6図、図版5)

I区南端に位置する。かなり削平を受けており、西側は調査区外に及ぶ。3号住居に切られている。南北3.8m以上、東西2.4m以上の不整形を呈し、検出面からの深さは、6cm程度である。中央土坑、柱穴が切り合いを持ち、拡張が行われたことがわかる。特に、古い段階の柱穴は黄色ブロックを含む土で埋められている。中央土坑とそのまわりに多主柱構造が確認できる。

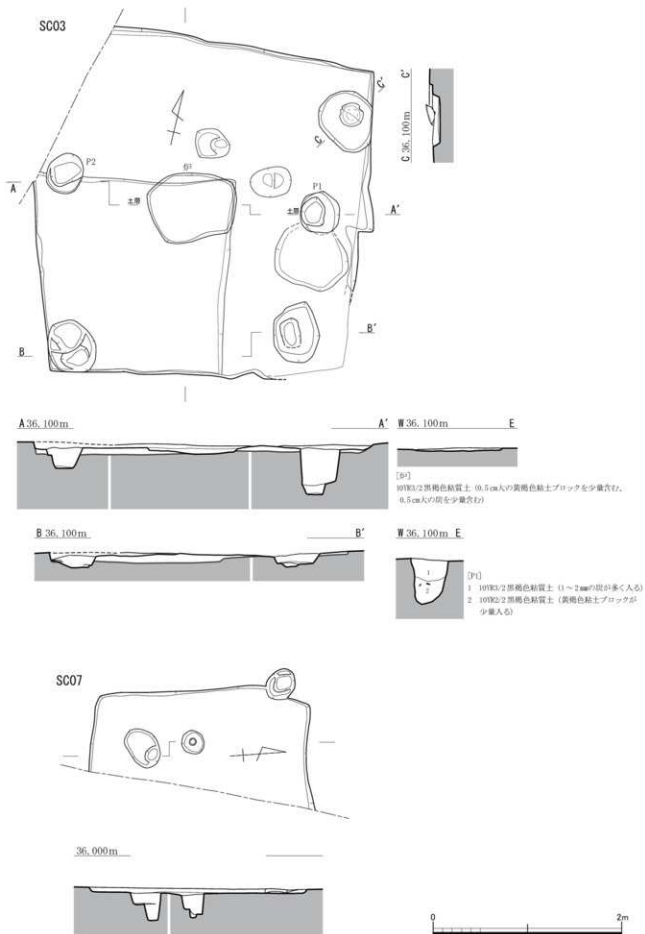
#### 出土遺物 (第11・20図)

弥生土器甕口縁部片 (23)、弥生土器甕底部 (24) が出土した。他に、砂質頁岩製磨製石鎌基部片 (第20図6) が出土している。

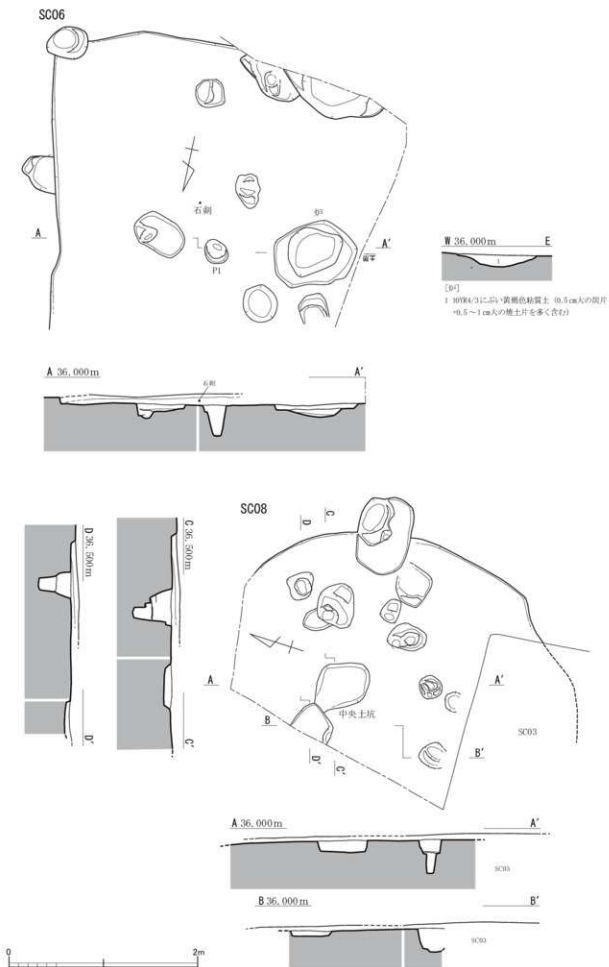
#### 10号住居跡 (第3・7図、図版5)

I区中央付近に位置する。西側は調査区外に及ぶ。9・16号住居、6・15号土坑、2号溝に切られており、特に南側は切り合いが激しい。土層では南側で切り合いを示す可能性がみられたり、10号住居南側ではやや古手の土器が床面から出土したため、別の住居跡と判断して、10号住居AとBに分けた。10号住居Bは北側のプランははっきりしているが、南側のプランは切り合いのためわからない。炉と考えられる焼土や炭を含む浅い土坑が2基みられ、そのあたりが住居の中心部かと考えられる。西側には深い掘り込みの柱穴がみられ、主柱と考えられる。南北5.6m程度、東西4.1m以上の東西に長い長方形を呈する住居と考えられる。検出面からの深さは、15cm程度である。主軸はほぼ南北方向である。

10号住居Aは10号住居南側で、検出中央部分でやや曲がる。検出面からの深さは8cm程度である。柱穴や中央土坑はみられない。

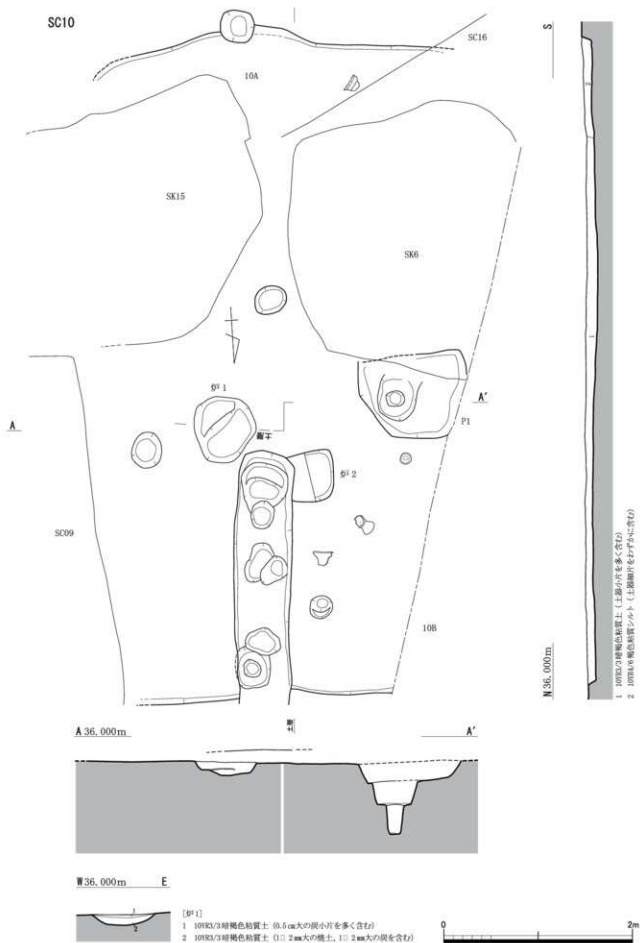


第5図 I区3・7号住居跡 実測図 (s=1/40)



第6図 I区6・8号住居跡 実測図 (s=1/40)





第7図 I区10号住居跡 実測図 (s=1/40)

#### 出土遺物 (第12・第20図、図版10・11)

弥生土器甕口縁部(1・2)、弥生土器器台(3)、弥生土器高坏脚部(4)、弥生土器椀(5・6・7)が出土した。甕口縁部(1)は10号住居A床面からの出土で、その他は10号住居B北側の床面から出土している。なお、弥生土器椀(5・6・7)は正位で3つが重ねて取まる形で出土した。他に砂質頁岩製石庖丁片(第20図5)、安山岩製砥石片(13)が出土している。

#### 11号住居跡 (第3図)

I区中央付近に位置する。かなり削平を受けており、東側は調査区外に及ぶ。15号土坑、9号住居に切られ、10号住居Aを切っている。やや弧を描く上端であり、円形もしくは小判型の住居かと思われる。検出面からの深さは10cm程度である。柱穴や中央土坑はみられない。

#### 出土遺物 (第12図)

弥生土器甕口縁部(8)が出土した。

#### 12号住居跡 (第3・8図、図版5)

I区北側に位置する。北側は調査区外に及ぶ。1号溝に切られている。建物構造がはっきりとせず、住居かどうか不明である。南北3.8m以上、東西2.6mの長方形を呈し、検出面からの深さは24cm程度である。北側には隅丸方形の土坑がみられ、南側と西側に柱穴がみられる。

#### 出土遺物 (第12図、図版11)

弥生土器甕胴部から底部(9)、弥生土器器台(10)が出土した。他に赤紫色泥岩製石庖丁(第20図3)が出土している。

#### 13号住居跡 (第3・8図、図版6)

I区中央付近に位置する。かなり削平を受けており、東側は調査区外に及ぶ。14・17号住居を切っている。主軸は北北西-南南東で、南北方向に3m、東西方向に2.7mの方形を呈する。ベッド状遺構が付随するであろう。検出面からの深さは8cm程度である。中央土坑とその両側に柱穴が確認できる。

#### 出土遺物 (第12・20図)

弥生土器甕底部(11)が出土した。他に砂質頁岩製磨製石蕨基部片(第20図1)、緑色片岩製石剣基部片(2)が出土している。

#### 14号住居跡 (第3・9図、図版6)

I区北側に位置する。13号住居に切られている。主軸はやや東に振る。南北4.0m、東西3.25mの方形で、検出面からの深さは10cm程度である。4本柱と考えられる。

#### 出土遺物 (第12図)

弥生土器甕口縁部片(12・13)、弥生土器壺口縁部片(14・15)が出土した。他に粘板岩製小形砥石片(第20図14)が出土している。

#### 15号住居跡 【欠番】

#### 16号住居跡 (第3・9図、図版6)

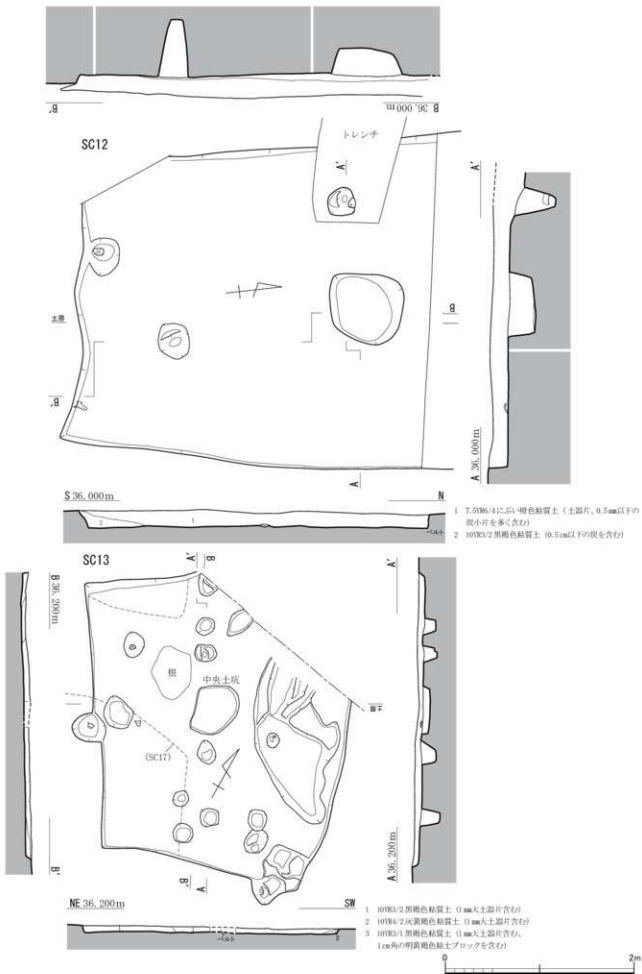
I区中央付近に位置する。北西側は調査区外に及ぶ。上部をSK06に削平され、4・15号土坑に切られている。主軸は北北西-南南東で、南北方向3.4m以上、東西4.0mの長方形を呈し、検出面からの深さは20cm程度である。中央に長方形の炉を持ち、その両側に主柱を持つ。ベッド状遺構を持つと考えられるが切り合いが激しく、その範囲はわからなかった。

#### 出土遺物 (第12図)

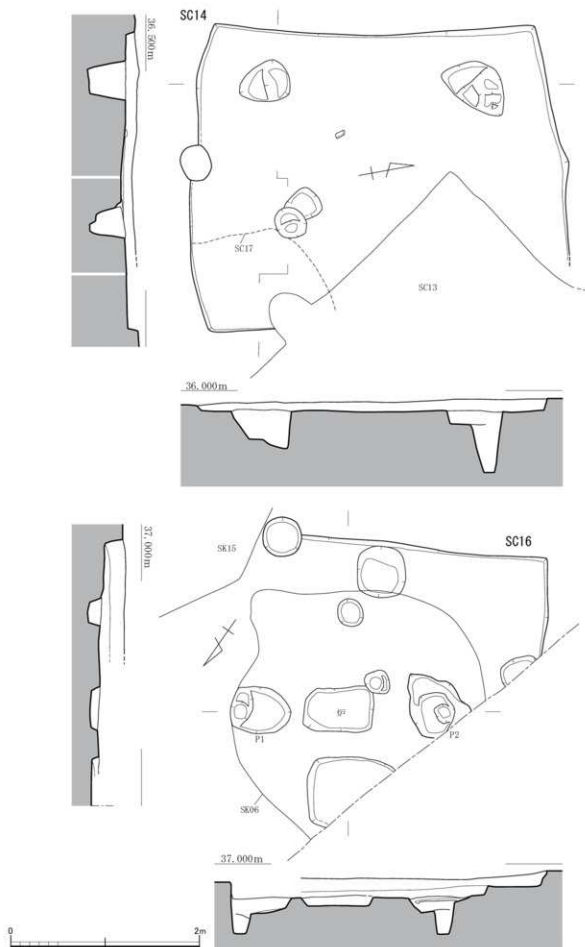
弥生土器甕口縁部片(16)、弥生土器高坏坏部(17)、弥生土器高坏脚部(18)が出土した。甕口縁部(16)はP1から出土した。

#### 17号住居跡 (第3図)

I区北側に位置する。南側は調査区外に及び、13・14号住居に切られている。長方形のプランが確認できる。

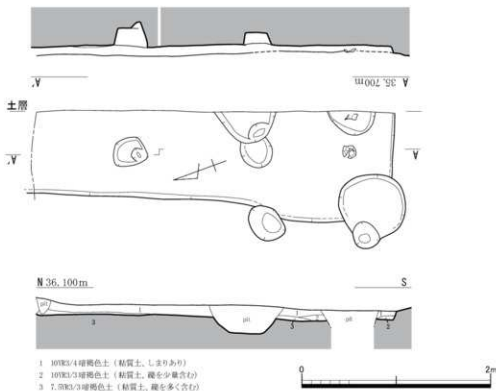


第8図 I区12・13号住居跡 実測図 (s=1/40)



第9图 I区14·16号住居跡 実測図 (s=1/40)

SC18



第10図 I区18号住居跡 実測図 (s=1/40)

### 18号住居跡 (第3・10図)

I区北側東端に位置する。北側と東側は調査区外に大部分が及ぶ。方形を呈し、主軸は北北東—南南西である。南北方向に3.8m以上、東西方向に1.25m以上の規模である。検出面からの深さは10cm程度である。

#### 出土遺物 (第12図)

弥生土器甕口縁部 (19)、弥生土器椀 (20)、弥生土器鉢 (21) が出土した。

## (2) 土坑

### 1号土坑 (第3・13図、図版6)

I区中央付近に位置する。かなり削平を受けている。4号住居跡と別遺構として調査したが、長軸1.56m、短軸1.28mの楕円形状を呈し、検出面からの深さは、最大で16cmである。底面には2本の小ピットがみられる。埋土から縄文土器が出土している。

#### 出土遺物 (第14図)

縄文土器深鉢口縁部片 (1) が出土した。

### 5号土坑 (第3図)

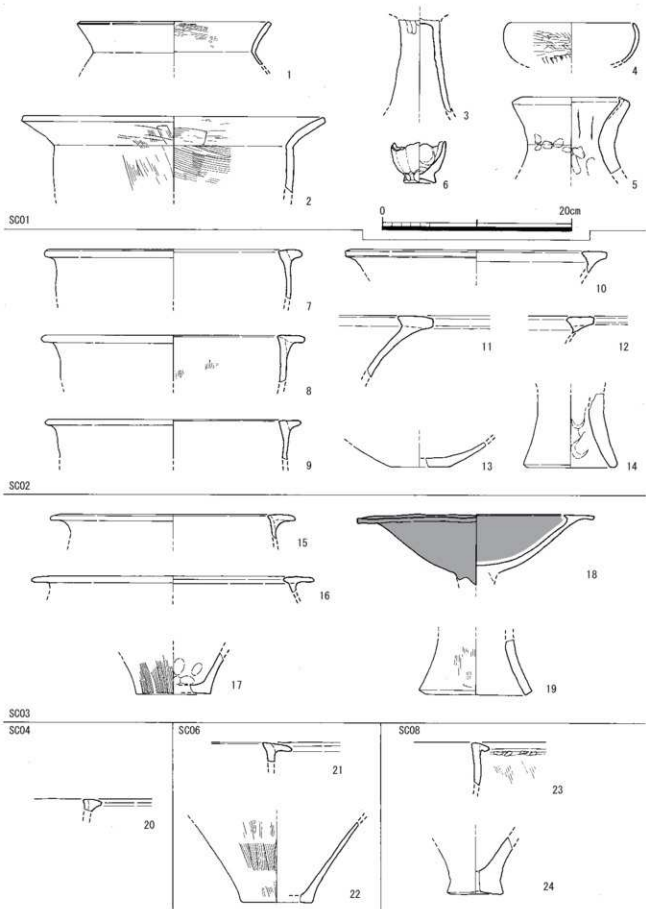
I区中央付近に位置する。かなり削平を受けている。長軸1.3m、短軸0.7m、深さ40cm程度の溝状の土坑である。

#### 出土遺物 (第14図、図版12)

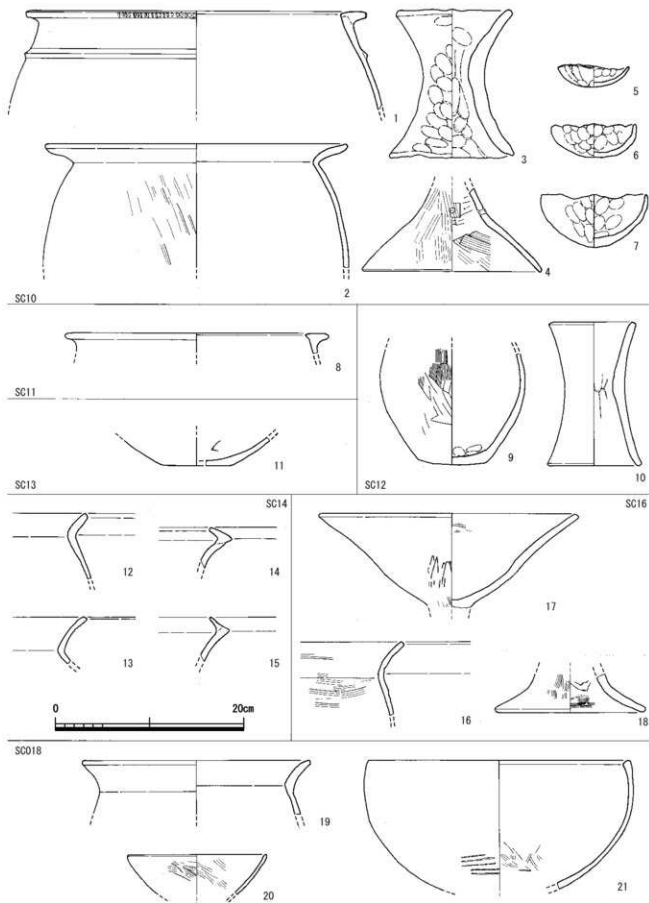
ミニチュア土器 (2)、弥生土器甕底部 (3) が出土した。

### 6号土坑 (第3・13図、図版7)

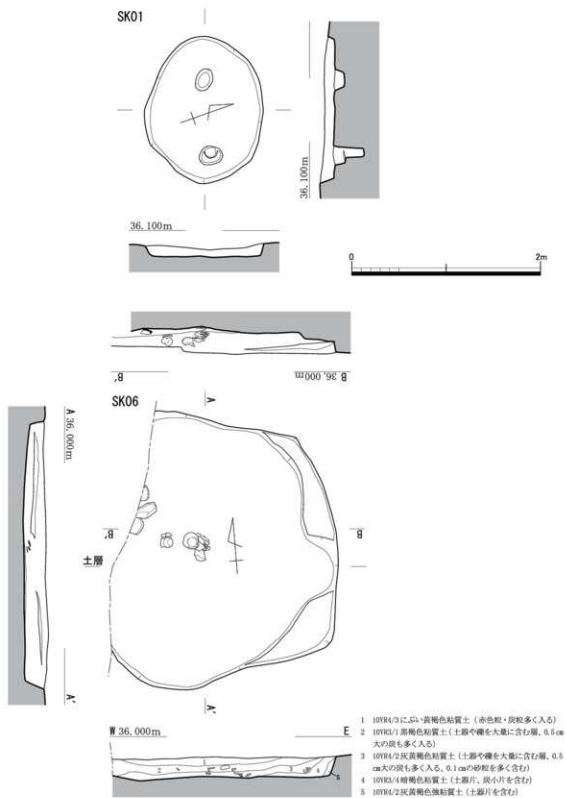
I区中央付近に位置する。4号土坑に切られ、10・16号住居を切っている。西側は調査区外に及ぶ。南北2.96m東西2.36m以上の不整形円形を呈し、検出面からの深さは、最大で25cmである。東側にはテラス状



第11图 I区住居跡出土土器実測図① (s=1/4)

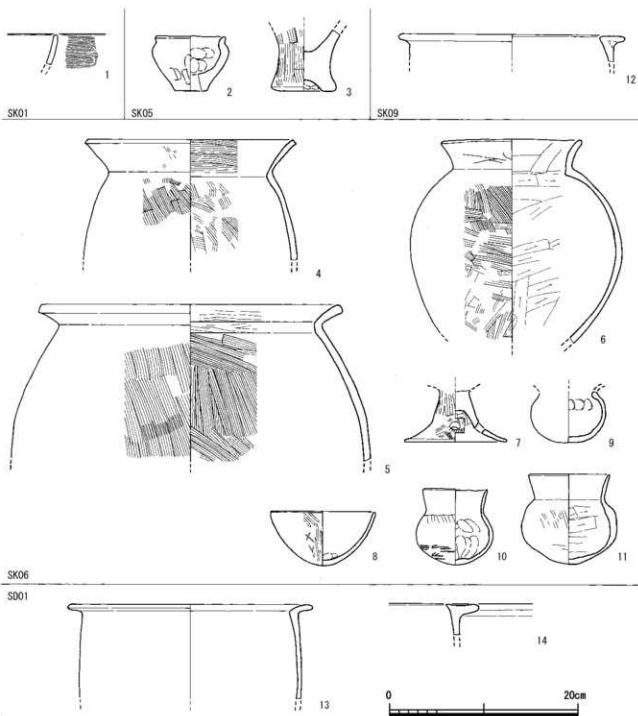


第12图 I区住居跡出土土器実測図② (s=1/4)



第13図 I区1・6号土坑 実測図 (s=1/40)





第14図 I区土坑・溝出土土器実測図 (s=1/4)

の段を有している。下層からは土器や礫がまとめて出土した。

**出土遺物** (第14・20図、図版11・12)

土師器甕(4～6)、土師器高坏脚部(7)、土師器碗(8)、小形丸底壺(9～11)が出土した。甕口縁部(16)はP1から出土した。他に、碧玉製の管玉(第20図9)、鉄鍔(15)が出土している。

### (3) 溝

#### 1号溝(第3図)

I区北側に位置する北北西—南南東方向の溝である。地形が下り始める箇所の際に位置する。長さ5.6m、幅1.2cm程度、深さ60cm程度である。

## 出土遺物（第14・20図）

弥生土器甕口縁部（13・14）が出土した。甕口縁部（14）は下層出土である。他に、砂質頁岩製石磨丁片（第20図4）、蛇紋岩製磨製石斧基部（7）が出土している。

## 2. 古墳時代後期から奈良時代の遺構と遺物

### (1) 住居跡

#### 9号住居跡（第15図、図版5）

I区中央に位置する。かなり削平を受けており貼床下層での検出と考えられる。8号土坑に切られ、東側は調査区外に及ぶ。主軸はほぼ南北方向である。南北5.9m程度、短軸4.0m以上の方形状を呈し、検出面からの深さは、12cm程度である。8号住居が住居内部を大きく壊しており、構造は不明である。

#### 出土遺物（第16・20図、図版10・15・17）

石製の小玉（第20図10）、大形の土錘片（17）が出土した。

### (2) 土坑

#### 2号土坑（第3・17図、図版6）

I区中央付近に位置し、1号不明遺構を切る。西側は調査区外側に及ぶ。平面は隅丸方形～不整形円形で、南北1.8m、短軸1.12m、深さ68cmを測る。壁面は東側にテラス面を持って階段状に立ち上がる。土器片や粘土ブロックを多く含む層が連続して堆積している。形態や埋土・遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。

#### 出土遺物（第19図）

須恵器蓋（1）、須恵器高台付坏（2）、土師器皿（3・4）、土師器甕（5・6）が出土した。

#### 3号土坑（第3・13図、図版6）

I区中央付近に位置する。1号不明遺構を切っている。長軸1.92m東西1.64mの不整形円形を呈し、検出面からの深さは、96cmである。断面形状はすり鉢状で、下層で一段深くなる箇所がみられる。上層からは土器が多く出土した。形態や埋土・遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。

#### 出土遺物（第19・20図）

須恵器坏口縁部（7）が出土した。他に平瓦片（第20図18）が出土している。

#### 4号土坑（第3・13図、図版7）

I区中央付近に位置する。6号住居、10号住居Aを切る。長軸2.88m、短軸1.2mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは、6cmである。南東部分に底面から浅い掘り込みがみられた。

#### 出土遺物（第19図）

須恵器坏口縁部片（8）が出土した。

#### 7号土坑（第3・13図、図版7）

I区中央付近に位置する。9号住居をわずかに切る。長軸1.52m東西1.2mの不整形円形を呈し、検出面からの深さは、65cmである。底面にはビット状の窪みが2ヶ所認められる。壁の立ち上がりは比較強い角度である。南側には細いテラス状の段を有している。ブロック土を含む人為的に埋めた層がみられる。

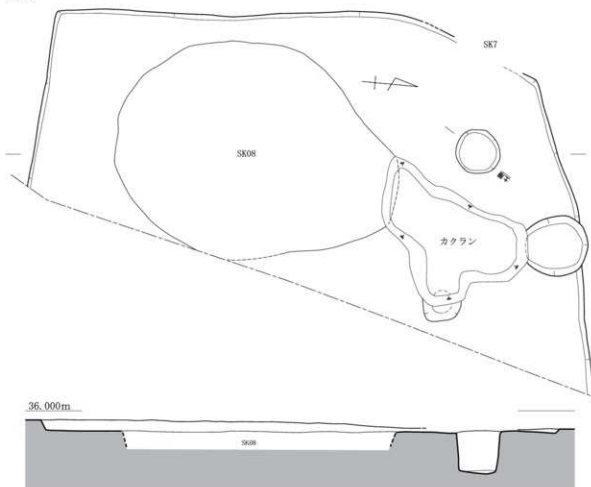
#### 出土遺物（第19図）

須恵器蓋（9）、須恵器高坏脚部（10）が出土した。

#### 8号土坑（第3・13図、図版7）

I区中央付近に位置する。9号住居を切る。長軸3.04m、短軸2.32mの長円形状を呈し、検出面から

SC09

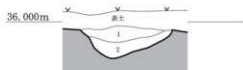


N 36,000m S



- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土 (0.5 cm大の 10YR6/4 に多い黄褐色粘土ブロックを含む)
- 2 10YR3/3 暗褐色粘質土 (0.5 cm大の 10YR6/4 に多い黄褐色粘土ブロックを多く含む)
- 3 10YR3/1 黒褐色粘質土 (1 mm大の団が散じる)

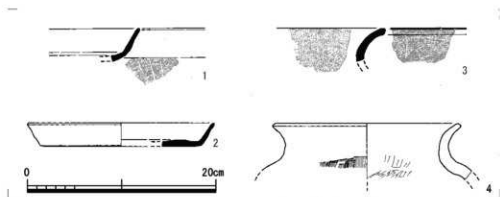
SD03 土層



- 1 10YR4/3 に多い黄褐色 (粘質土、礫を少量含む)
- 2 10YR4/4 褐色 (粘質土、礫を多く含む)



第15図 I区9号住居跡 実測図 (s=1/40)



第16図 I区住居跡出土土器実測図③ (s=1/4)

の深さは、1.36mである。壁は北側、南側ではテラスを持ちつつ階段状に下がる。土器片を多く含み、上位では焼土や炭層が層状に分布する。形態や埋土・遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。

#### 出土遺物 (第19・20図、図版12・13)

須恵器蓋 (12)、土師器蓋 (13)、須恵器高台付坏 (14・15)、土師器皿 (16・18)、須恵器皿 (17)、須恵器鉢 (19) が出土した。土師器蓋 (13) の上面には3本の交わる細い直線を刻んでいる。土師器皿 (16) は底面に「中」の縦線が非常に長い刻線が確認できる。文字であるのか、記号であるのか判断が難しい。他に、粘板岩製砥石 (11)、流紋岩製砥石 (12)、鉄釘 (16)、鉄滓が出土している。

#### 15号土坑 (第3・13図、図版7)

I区中央付近に位置する。9号住居に切られ、10・11・16号住居を切っている。長軸2.88m、短軸2.64mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは、50cm程度である。底面は一定せず、北側が一番深くなっている。ピット状の掘り込みもある。壁は南側や北側でテラス状の段を有している。全体的に礫を多く含み、第4層では焼土を多く含んでいる。

#### 出土遺物 (第19図、図版12・13・14)

須恵器坏蓋 (20)、須恵器坏身 (21)、須恵器低脚高坏 (22)、土師器甕口縁部 (23) が出土した。

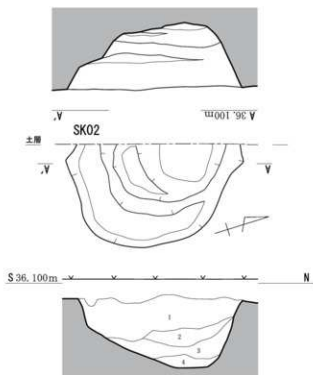
### (3) 溝

#### 2号溝 (第3図)

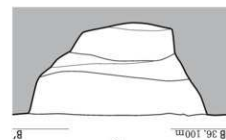
I区中央付近に位置する南北方向の溝である。長さ5.8m、幅60cm程度、深さ40cm程度である。

#### 3号溝 (第3図、図版7)

I区北側に位置する南北方向の溝である。検出長4.6m、幅1m程度、深さ35cm程度である。

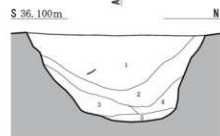


- 1 10YR4/3に灰・黄褐色粘質土（土器片、段0.5cm大を多く含む）
- 2 10YR4/3に灰・黄褐色粘質土（2~3cm大の10YR7/6明黄褐色粘土ブロックを含む、黒70、黄30）
- 3 10YR4/2灰黄褐色粘質土（細砂・破片、土器片を含む）
- 4 2層と同じ（黒40、黄40）

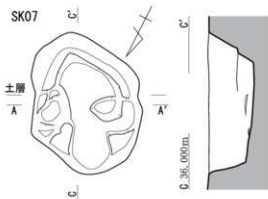


SK03

土層



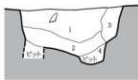
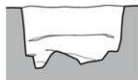
- 1 10YR4/2灰黄褐色粘質土（0.5cm大の破片、土器小片を多く含む）
- 2 10YR3/2褐色粘質土（0.5cm大の破片、土器小片を多く含む）
- 3 10YR4/3に灰・黄褐色粘質土
- 4 3層・3~5cm大の2.0Y7/6 明黄褐色粘土ブロックを含む
- 5 10YR5/3に灰・黄褐色粘質土



A 36.000m

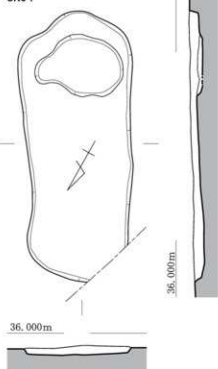
N 36.000m

S



- 1 10YR4/3に灰・黄褐色粘質土（3cm大の10YR明黄褐色粘土ブロックを多く含む、炭化物・赤色鉄を含む）
- 2 10YR4/2灰黄褐色粘質土（1~3cm大の10YR7/6明黄褐色粘土ブロックを少量含む）
- 3 10YR4/6褐色粘質土（土器片含む）
- 4 10YR4/2灰黄褐色粘質土（炭小片を含む）

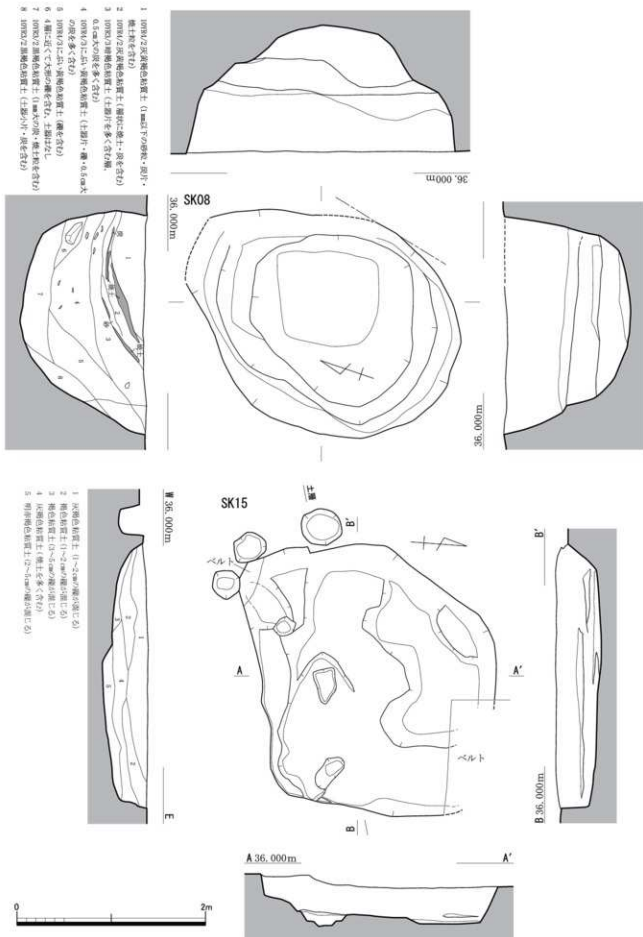
SK04



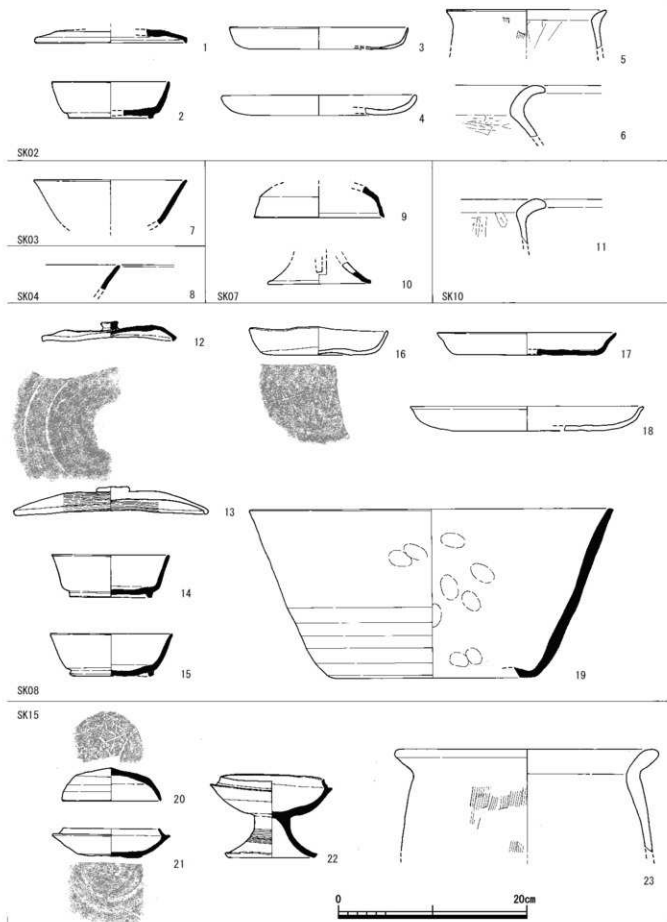
36.000m

0 2m

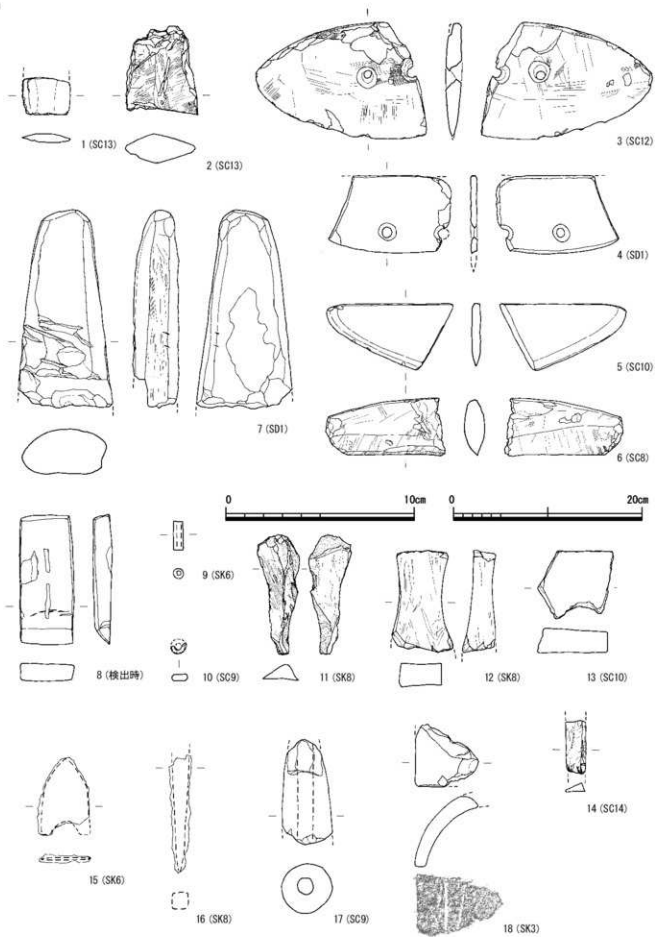
第17図 I区2・3・4・7号土坑 実測図 (s=1/40)



第18図 I区8・15号土坑 実測図 (s=1/40)



第19图 I区土坑出土土器实测图 (s=1/4)



第20図 I区出土石器・鉄器・土製品ほか実測図 (s=1/2, 11~14・18はS=1/4)



## 第4章 II区の調査

### 1. 弥生時代中期から古墳時代前期の遺構と遺物

#### (1) 住居跡

##### 1号住居跡 (第3・21図、図版8)

II区東端に位置する。かなり削平を受けており、南から東辺は調査区外に及ぶ。2号住居を切る。やや主軸は西に振るか。南北3.93m以上、東西3.0m以上の方形形状を呈し、検出面からの深さは6cm程度である。埋土は褐色から黒褐色土である。北東側の2基の柱穴は住居を切るもの。住居内では主柱を1基検出している (P1)。床面からは2cm程度の水晶片が出土した。やや赤味がかっている色調である。現代の攪乱遺物の可能性もあるが、周辺では大きな攪乱がみられないことや床面からの出土であることから記録をとった。そのほか、床面から壺底部などが出土している。

##### 出土遺物 (第23図)

弥生土器甕口縁部 (1)、弥生土器壺口縁部 (2)、弥生土器壺底部 (3) が出土した。甕口縁部 (1) が②、壺口縁部 (2) が③、壺底部 (3) が①の位置から出土した。

##### 2号住居跡 (第3・21図、図版8)

II区東側に位置する。かなり削平を受けており、南側は調査区外に及ぶ。1号住居に切られる。弧を描くプランで、楕円形もしくは不整形の住居であろうか。東西5.4m以上、南北2.3m以上、検出面からの深さは8cm程度であった。埋土は主に黒褐色土である。

##### 出土遺物 (第23図)

P1から弥生土器甕口縁部 (4) が出土した。

##### 3号住居跡 (第3・22図、図版8)

II区西端に位置する。かなり削平を受けており、南側は調査区外に及ぶ。北側から西側はベット状遺構である可能性がある。4号土坑に切られている。主軸は南北方向で、南北4.76m以上、東西4.56mの長方形を呈すると思われる。検出面からの深さは22cm程度であった。埋土は主に暗褐色粘質土である。中央に焼土が分布する。掘り込みはほとんどない。主柱は2主柱と考えられ。調査区内では北側の主柱のみ検出した。小形丸底壺など、床面からの出土遺物がみられた。明確な貼床層は確認できなかった。

##### 出土遺物 (第23図、図版14)

土師器甕 (5)、土師器甕底部 (6) 小形丸底壺 (7・9)、小形椀 (8) 小形丸底鉢 (10) が出土した。いずれも床面近くからの出土である。他に、鉄製摘鎌 (11)、粘板岩製大形砥石 (13)、ミニチュア土器 (12) が出土している。ミニチュア土器は上げ底の底部を持ち、その上部は中実である。そこから斜め上方に広がりを見せる。外面はハケム調整である。器形が何になるのか判断がつかない。

#### (2) 土坑

##### 2号土坑 (第3・24図、図版9)

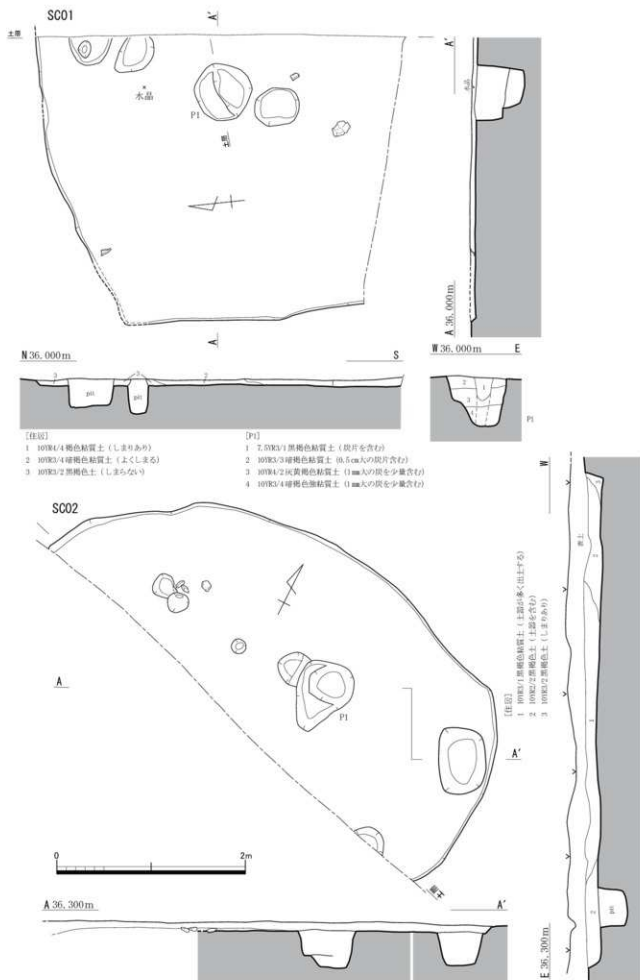
II区東側に位置する。長軸1.8m、短軸1.6mの隅丸方形形状を呈し、検出面からの深さは、70cmである。上層から土器がまともに出て出土した。

##### 出土遺物 (第26図、図版15)

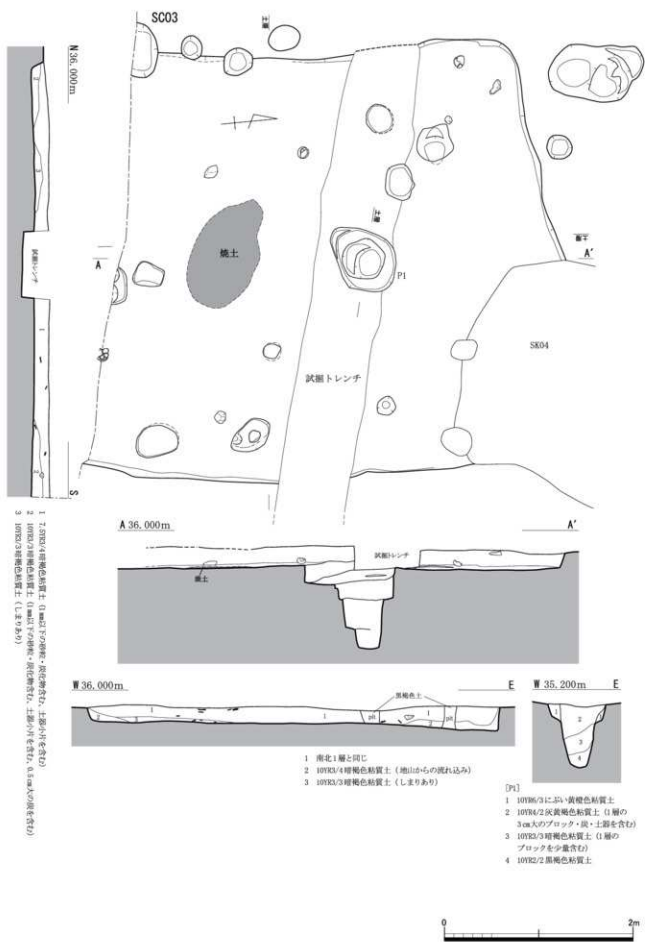
弥生土器甕胴部から口縁部 (1・2)、弥生土器壺底部 (3) が出土した。甕 (1) は隣接するSK03資料と接合した。少なくとも廃棄の際の一時期の同時性が考えられる。甕胴部から口縁部 (2) は④、壺底部 (3) は②からの出土である。

##### 3号土坑 (第3・24図、図版9)

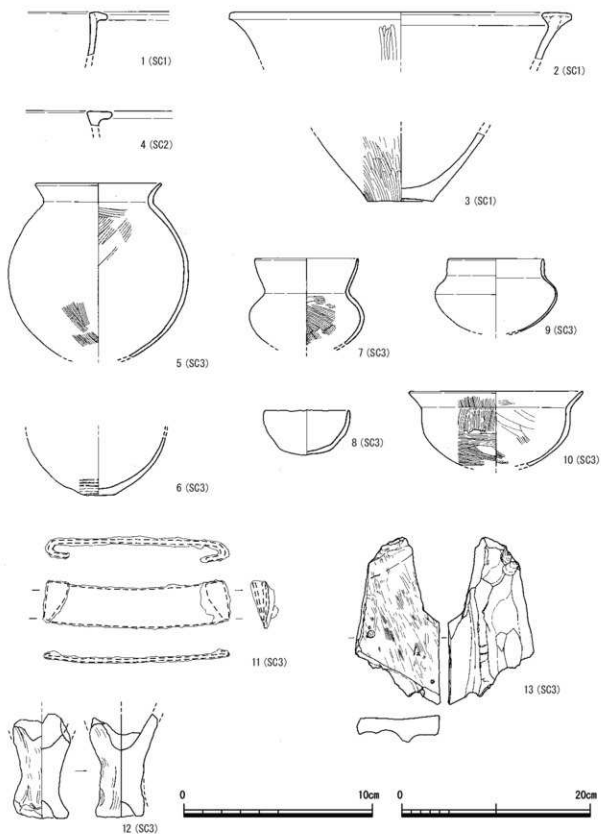
II区東側に位置する。1号住居を切る。当初北東側の小土坑を別遺構と考え先に掘削したが、出土する土器が同一個体であることから、一つの土坑と考えて記録した。ベース土と埋土が似通っており、検出が難しかった。長軸3.36m、短軸2.68mの隅丸方形形状を呈し、検出面からの深さは、最大で18cmである。土器が広い範囲でまともに出て出土した。



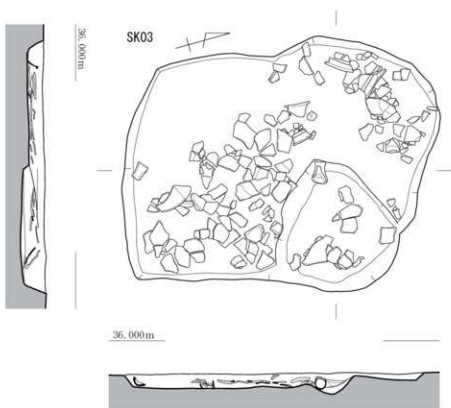
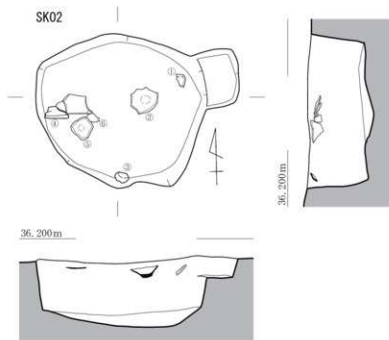
第21図 II区1・2号住居跡 実測図 (s=1/40)



第22図 II区3号住居跡 実測図 (s=1/40)



第23图 II区住居跡出土土器・石器・鉄器・土製品実測図 (s=1/4、11・12はs=1/2)



第24图 II区2·3号土坑 实测图 (s=1/40)

#### 出土遺物 (第26図、図版15)

弥生土器甕口縁部 (4)、弥生土器壺口縁部 (5)、弥生土器器台 (6・7) が出土した。

#### 6号土坑 (第3・25図)

Ⅱ区中央付近に位置する。1号溝に切られる。南北1.2m、東西0.76m以上、深さ40cmである。北側にはテラスを持ち、階段状に下がる。

#### 出土遺物 (第26図)

弥生土器甕口縁部 (8) が出土した。

### (3) 溝

#### 1号溝 (第3図、図版9)

Ⅱ区西側に位置する南北方向の溝である。4号土坑に切られる。3号住居東辺に沿う形で伸びている。検出長4.6m、幅0.9m程度、深さ60cm程度である。埋土の上層では比較的土器片が混入している。

#### 出土遺物 (第26図)

弥生土器甕口縁部 (13)、弥生土器壺口縁部 (14・15)、弥生土器甕底部 (16) が出土した。

## 2. 古墳時代後期から奈良時代の遺構と遺物

### (1) 土坑

#### 1号土坑 (第3・図、図版9)

Ⅰ区東側に位置する。長軸1.6m、短軸1.24mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは、36cmである。埋土は粘土ブロックを含む暗褐色系土である。

#### 出土遺物 (第26図)

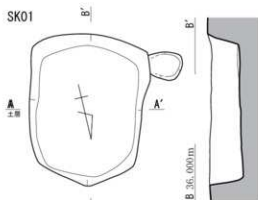
須恵器高台付坏 (9) が出土した。

#### 4号土坑 (第3・17図、図版9)

Ⅰ区西側に位置し、3号住居、1号溝を切る。北側は調査区外側に及ぶ。平面は隅丸方形と考えられ、南北1.3m以上、東西2.5m以上、深さ72cmを測る。壁面は東西にテラス面を持って階段状に立ち上がる。土器片や粘土ブロックを多く含む褐色～暗褐色土の埋土が連続して堆積している。形態や埋土・遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。

#### 出土遺物 (第26図、図版15)

須恵器高台付坏 (10)、土師器甌 (11・12) が出土した。土師器甌 (11・12) は同一個体と考えられる。



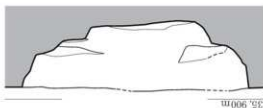
A 36.000m



E 36.000m

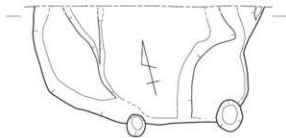


- 1 10YR4/2 灰黄褐色結質土（土器片含む、0.5~1cm大の黄褐色結土ブロックを含む、しまりなし）
- 2 10YR3/4 暗褐色結質土（土器片・0.2mm大の炭を少量含む）
- 3 10YR4/3 に近い黄褐色結質土（1mm以下の砂粒を少量含む）
- 4 10YR5/6 黄褐色結質土（0.5cm大の明黄褐色結土ブロックを少量含む）
- 5 10YR4/4 褐色結質土（0.5cm大の明黄褐色結土ブロックを少量含む）

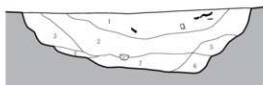


0006 22

SK04

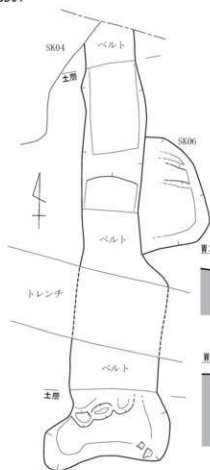


35.900m



- 1 7.5YR4/2 灰褐色結質土（縄や土器を多く含む、下層に0.5cm大の炭を多く含む、0.5cm大の塊土を含む）
- 2 10YR3/3 暗褐色結質土（よくしまる、1~2mm大の炭を全体に含む）
- 3 10YR4/3 に近い黄褐色結質土（縄を含む、1~2mm大の炭を少量含む）
- 4 10YR4/4 褐色結質土（しまりあり、0.5cm大の黄ブロック土を含む）
- 5 10YR4/4 褐色結質土（明黄褐色結土ブロックを多く含む）
- 6 10YR4/4 褐色結質土（しまりあり）
- 7 10YR4/4 褐色結質土（縄を含む）

SD01



W 36.100m E



【北側】

- 1 に近い黄褐色結質土（10YR4/3、1mm以下の炭を少量含む）
- 2 南の第1層と同じ
- 3 南の第2層と同じ
- 4 褐色結質土（10YR4/4、に近い黄褐色ブロックをわずかに含む）

W 36.100m E

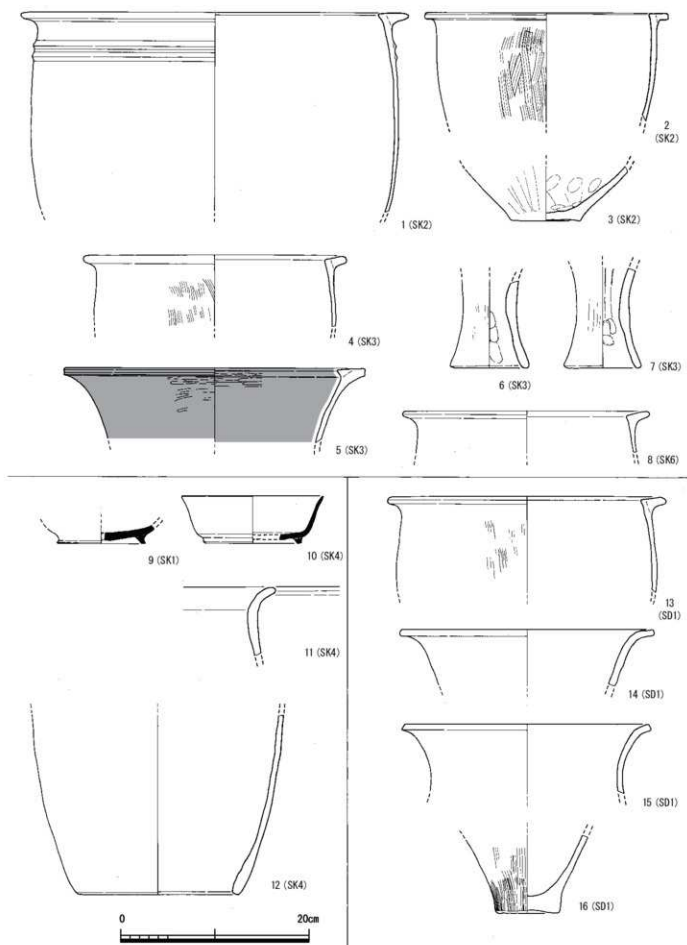


【南側】

- 1 に近い黄褐色結質土（10YR4/3、1mm大の土器細片・炭を多く含む）
- 2 に近い黄褐色結質土（10YR4/3、0.4mm大の黄ブロックを多く含む）
- 3 暗褐色結質土（10YR3/4、1mm大の炭を少量含む）
- 4 褐色土（10YR4/4、1mm大の炭を少量含む）
- 5 黄褐色土（10YR5/6、黄ブロック土を含む）



第25図 II区1・4号土坑 1号溝 実測図 (s=1/40)



第26图 II区土坑·溝出土土器实测图 (S=1/4)



## 第5章 調査成果のまとめ

津古東宮原遺跡7では、縄文時代の土坑1基、弥生時代中期から古墳時代前期の住居跡18軒、土坑6基、溝2条、奈良時代の住居跡1軒、土坑8基、溝2条を検出した。

遺構の変遷について簡潔にまとめておく。

古くは、I区SK01で塞ノ神式土器の口縁部片が出土している。楕円形状を呈する土坑で、底面中央に2つの小ピットがある。上部は削平が見込まれるが、落とし穴状遺構とするには1m以上の削平を受けていることになり、その可能性は低いかと思われ、土坑としている。

その後、弥生時代前期末・中期初頭から集落が展開し、I区SC10Aが板付Ⅱc式期、I区SC04・SC08・SK05が城ノ越式期に該当する(第27図)。調査区の南側に分布する。住居形態は円形、もしくは隅丸方形がみられる。中期前半(須玖Ⅰ式)にはI区SC02・SC11・SK09に加えて、II区SC01・SC02・SK02・SK03・SK06にも広がりを見せる(第27図)。住居形態は方形と小判型が混在するようである。中期後半(須玖Ⅱ式)には、I区SC03・SC06・SD01がみられる(第27図)。住居形態は方形へ変化しており、北北西―南南東方向のSD01とSC03・SC06は同様の主軸を持っている。調査区が矮小で全体像が分らないが、このSD01が区画溝となっているだろう。SD01より、東側には調査区内では同時期の遺構は確認できない。限られた調査区内ではあるが、調査区の西南側で前期末・中期初頭の遺構が分布し、中期前半には調査区全域に遺構が広がりを見せ、中期後半には遺跡の西側に分布が偏るように変遷する。

後期初頭～前葉(高三溝式)にはI区の北側でSC10B・SC12・SC14がみられ、後期中葉～後葉(下大隈式)には、同様の箇所で切り合いを持つSC13・SC18などがみられる(第27図)。後期末から古墳時代初頭(西新式)には、I区SC01・SC16がある。削平を大きく受けており、貼床面下層での検出もあり、ベッド状遺構を持つ構造でも削平されてその部分が消失している可能性が高い。後期初頭から前葉には住居主軸が正南北方向を志向し、後期中葉以降では北東―南西方向に傾きを見せるようになる。

古墳時代前期(布留式)では、I区SK06、II区SC03がみられる(第28図)。SK06は土器が多く集積しており、やや時期幅のある土器が出土している。埋没にも数段階の時期が考えられる。やや離れた箇所に住居と土坑がみられるが、その間には住居群が展開しているのであろう。住居の主軸は正南北に近い。

その後、空白の時期があり、次に遺構がみられるのが、古墳時代後期、6世紀末～7世紀初頭の時期である。I区SK07・SK15が該当する(第28図)。

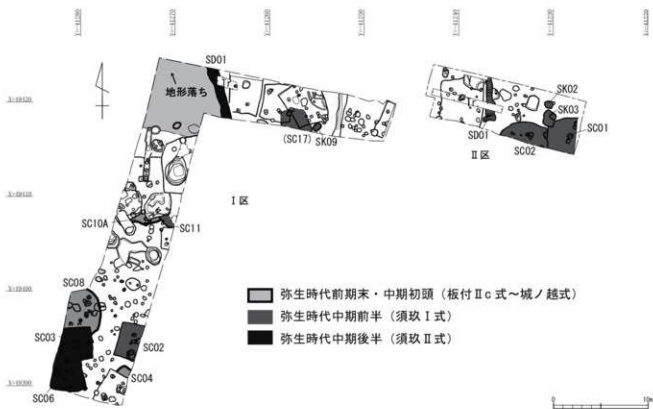
さらに、少し空白時期を経て、奈良時代になって再び集落が展開するようになる(第28図)。I区SC09・SK02・SD02・SD03、II区SK01・SK04が8世紀前半までの遺構である。SC09は貼床面以下の検出と考えられ、かなり削平を受けている。攪乱が入り、SK08に大きく切られており、支柱構造等がはっきりしない。また、カマドについても検出できていない。SD02とSD03はやや東に振る南北方向の溝状遺構で集落内部を区画する小規模な溝と思われる。また、廃棄土坑I区SK02やII区SK04がみられた。8世紀後半には、I区SK03・SK04・SK08がみられる。SK03・SK08は廃棄土坑で、SK08は比較的大形の土坑である。

津古東宮原遺跡7では、古くは縄文時代から人々の生活の営みを垣間見ることができ、奈良時代まで間断を持ちながら、連続している。特に古墳時代前期の当地域の首長墓系列である津古古墳群と関連する集落群が津古遺跡群には展開しており、東宮原遺跡のその中に含まれる(山崎2018・2019)。津古東宮原遺跡7の古墳時代前期のII区SC03やI区SK06などは非常に津古1号墳とも重なる時期でその動向が重要である。

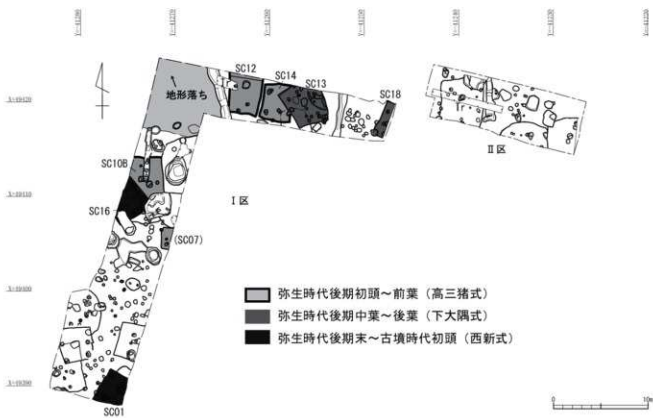
6次調査までの遺構変遷と周辺遺跡の動向も併せて検討するべきではあるが、報告者の力不足で7次調査のみの検討となった。今後の課題とすることを許されたい。

### 【参考文献】

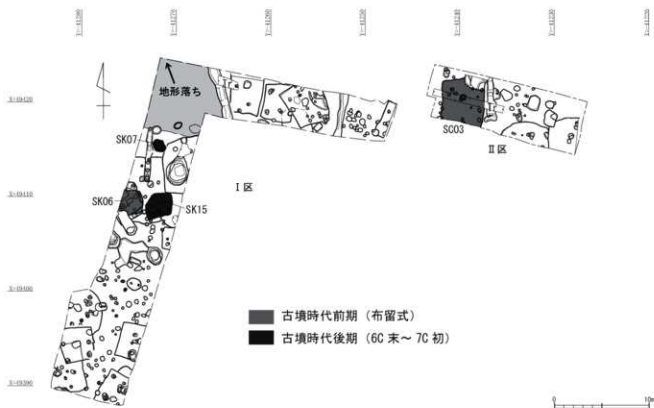
- 山崎頼人2018「筑後地域の集落と古墳―弥生時代終末期～古墳時代前期―」『集落と古墳の動態Ⅰ―弥生時代終末期～古墳時代前期―』第21回九州前方後墳研究会鹿児島大会
- 山崎頼人2019「弥生／古墳の境界(素描)―津古古墳群と集落動態―」『論集 葬送・墓・石塔』狭川真一さん還暦記念会



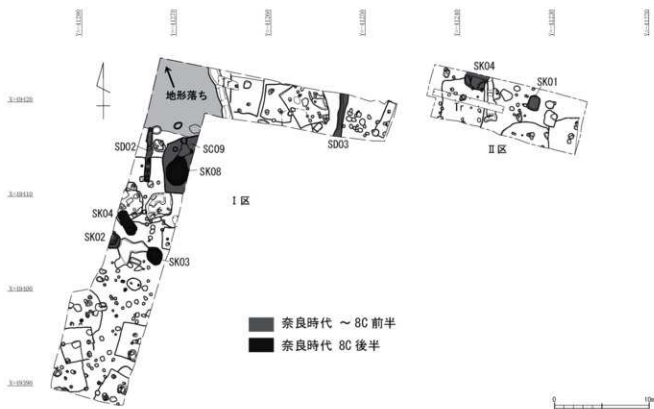
第27図 津古東宮原遺跡7変遷図①



第28図 津古東宮原遺跡7変遷図②



第27図 津古東宮原遺跡7変遷図③



第28図 津古東宮原遺跡7変遷図④







津古東宮原遺跡7 出土土製品・石製品・鉄製品等観察表

出土遺物	発掘 層位	図面 番号	群名	法量 (cm) (備注)	石材料	備考	
SC3	20-1	16	磨製石鏡	長12.0 幅2.6 厚0.5 重2.7	砂岩 其石		
	20-2	16	石鏡	長14.7 幅3.9 厚1.6 重20.6	砂岩 其石	厚部1.3mmに厚加工が 行われたと思われる	
SC12	PH	20-3	17	石鏡片	長19.1 幅9.2 厚0.9 重5.1	自然石 其石	内径厚0.5mm 外径厚1.2mm
SD1		20-4	17	石鏡片	長16.1 幅14.1 厚0.15 重14.9	砂岩 其石	直径厚0.2mm 上記の石鏡片の片
SC10	北西	20-5	—	石鏡片	長16.7 幅2.5 厚0.3 重1.4	砂岩 其石	
SC8	PH	20-6	17	石鏡	長19.2 幅3.0 厚1.1 重21.4	砂岩 其石	
SD1	南西 上層	20-7	18	磨製石鏡	長10.1 幅1.0 厚0.4 重1.9	砂岩 其石	厚部磨削面が石鏡面中心部から外縁部にかけて上層部で確認できず
群名 不明		20-8	18	磨製片形 石鏡片	長18.1 幅2.9 厚1.00 重40.9	輝石岩	
SH6	上層	20-9	15	管玉	長11.1 幅10.1 厚0.1 重0.7	岩	直径0.5mm
SC9	PH	20-10	15	玉	長10.0 幅0.0 厚0.4 重0.2	石	磨削加工白色化
SH8	下層 南半	20-11	18	鏡石	長12.7 幅4.6 厚1.9 重19.0	砂岩 其石	
SH8	下層 南半	20-12	18	鏡石	長13.0 幅4.9 厚2.1 重20.0	砂岩 其石	
SC10	PH	20-13	18	鏡石	長17.2 幅4.1 厚2.7 重27.7	砂岩 其石	
SC14	西半	20-14	18	鏡石	長13.1 幅2.1 厚1.00 重15.4	砂岩 其石	
SH6	北半	20-15	18	鏡石	長14.1 幅2.4 厚0.5 重7.0	—	
SH8	上層 北半	20-16	18	釘	長19.2 幅0.9 厚0.9 重9.4	—	
SC9	南半	20-17	17	土鏡	長13.1 幅2.7 厚2.7 重20.0	—	厚土1.0mm程度で厚部中心部、色調一致が中心部裏面～1.2cm以内、磨削 痕跡、中央部 調整、片厚7mm、表面の土鏡片
SH3	西半	20-18	14	瓦	長18.1 幅6.7 厚2.0	—	厚土1.0mm、色調一致が中心部裏面～1.2cm以内、磨削 痕跡、中央部 調整、片厚7mm、表面の土鏡片
SC3	北西	20-11	19	鏡石	長19.0 幅2.0 厚0.2 重2.2	—	
	北西	20-12	14	不明 土製品	長15.1 幅1.6 厚1.0	—	厚土1～2mm程度で厚部中心部、色調一致が中心部裏面～1.2cm以内、磨削 痕跡、中央部 調整、片厚1.2mm、表面の土鏡片、1.7mm厚の土鏡片
	石鏡片	20-13	18	鏡石	長17.6 幅1.0 厚0.2 重1.0	砂岩 其石	厚部1.0mm以内で厚部中心部、色調一致が中心部裏面～1.2cm以内、磨削 痕跡、中央部 調整、片厚7mm、表面の土鏡片





## 写真図版



発掘作業風景（左・三国中学校職場体験 右：猛暑到来）

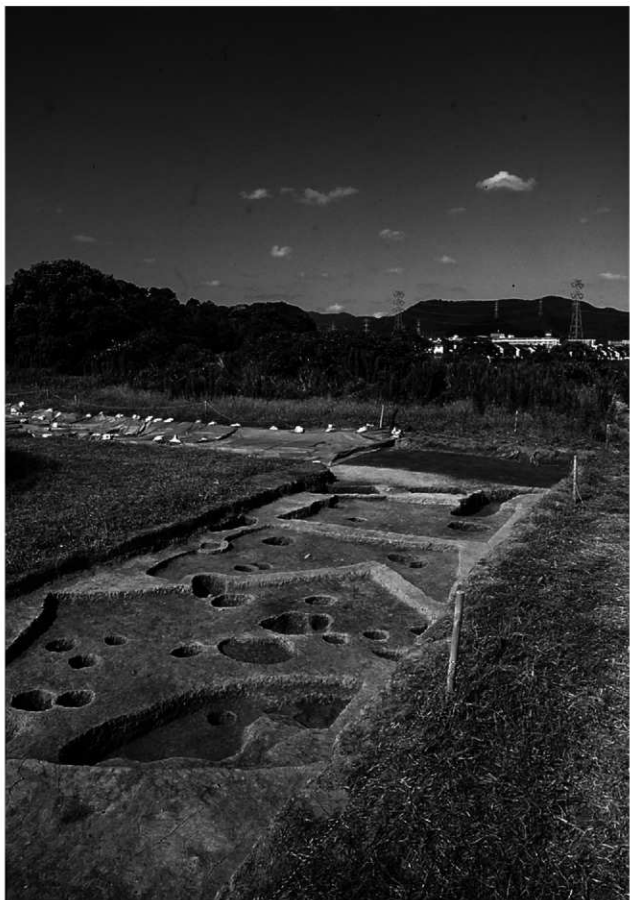
図版 1



津古東宮原遺跡71区南側調査区全景（北東から）



津古東宮原遺跡71区北東側調査区全景（南東から）



津古東宮原遺跡71区北側調査区全景（北東から）

図版3



津古東宮原遺跡7Ⅱ区調査区全景①（北西から）



津古東宮原遺跡7Ⅱ区調査区全景②（北東から）



① I区1号住居跡(南東から)



② I区1号住居跡ミニチュア土器出土状況(西から)



③ I区2号住居跡(東から)



④ I区2号住居跡が跡土層断面(北から)



⑤ I区3号住居跡(南から)



⑥ I区3号住居跡土器出土状況(北から)

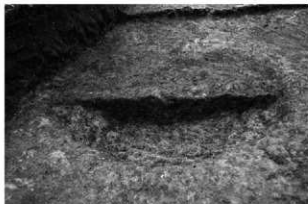


⑦ I区3号住居跡貼床除去後(東から)



⑧ I区6号住居跡(南西から)

図版5



① I区6号住居炉跡(南から)



② I区6号住居跡全景(南から)



③ I区7号住居跡(北東から)



④ I区8号住居跡土層断面(南から)



⑤ I区8号住居跡柱穴検出(南東から)



⑥ I区9号住居跡土層断面(北から)



⑦ I区10号住居跡(南東から)



⑧ I区12号住居跡(北から)



① I区13・14号住居跡(北西から)



② 13号住居跡中央土坑土層断面(西から)



③ I区16号住居跡(北西から)



④ I区1号土坑土層断面(東から)



⑤ I区1号土坑完掘(東から)



⑥ I区2号土坑土層断面(東から)



⑦ I区3号土坑土層断面(東から)



⑧ I区3号土坑完掘(東から)

図版 7



① I区4号土坑(北東から)



② I区6号土坑土層(南から)



③ I区6号土坑土器出土状況(南から)



④ I区7号土坑(北から)



⑤ I区8号土坑(北から)



⑥ I区15号土坑(北から)



⑦ I区15号土坑完掘(南から)



⑧ I区3号溝土層断面(南から)





①Ⅱ区1号住居跡(北から)



②Ⅱ区1号住居土器出土状況(北東から)



③Ⅰ区1号住居水晶出土状況(東から)



④水晶出土状況詳細(南東から)



⑤Ⅱ区2号住居跡(北から)



⑥Ⅱ区3号住居跡土層断面(南から)



⑦Ⅱ区3号住居跡(西から)



⑧Ⅱ区3号住居遺物出土状況(北から)

図版9



①Ⅱ区1号溝土層(南から)



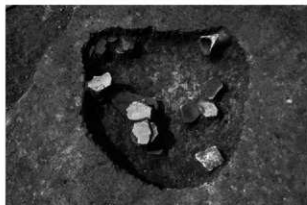
②Ⅱ区1号土坑土層(北から)



③Ⅱ区1号土坑完掘(北から)



④Ⅱ区2号土坑土器出土状況(北から)



⑤Ⅱ区3号土坑土器出土状況①(東から)



⑥Ⅱ区3号土坑土器出土状況②(東から)



⑦Ⅱ区4号土坑土層(南から)



⑧Ⅱ区5号土坑完掘(北から)



I区SC 1 (11-6)



I区SC 2 (11-14)



I区SC 3 (11-18)



I区SC09 (16-1)



I区SC09 (16-3)



I区SC09 (16-3)



I区SC09 (16-2)



I区SC10 (12-4)

图版11



I区SC10 (12-5)



I区SC10 (12-6)



I区SC10 (12-7)



I区SC10 (12-3)



I区SC10 (12-1)



I区SC10 (12-2)



I区SC12 (12-10)



I区SK06 (14-9)

I区10·12号住居、6号土坑出土土器



I区SK06 (14-10)



I区SK06 (14-11)



I区SK06 (14-8)



I区SK06 (14-4)



I区SK 8 (19-14)



I区SK 8 (19-15)



I区SK08 (19-17)



I区SK08 (19-18)



I区SK08 (19-19)



I区SK15 (19-23)



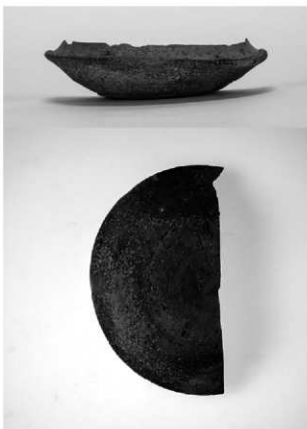
I区SK08 (19-13)



I区SK08 (19-16)



I区SK15 (19-20)



I区SK08 (19-21)



I区SK15 (19-22)



I区SK03 (20-18)



II区SC03 (23-7)



II区SC03 (23-9)



II区SC03 (23-5)



II区SC03 (23-10)



II区SC03 (23-8)



II区SC03 (23-12)

I区15·3号土坑、II区3号住居跡出土土器

図版15



Ⅱ区SK02 (26-1)



Ⅱ区SK03 (26-7)



Ⅱ区SK03 (26-6)



Ⅱ区SK04 (26-10)



I区SK06 (20-9)



I区SK08 (20-10)



I区谷部 (写真のみ)



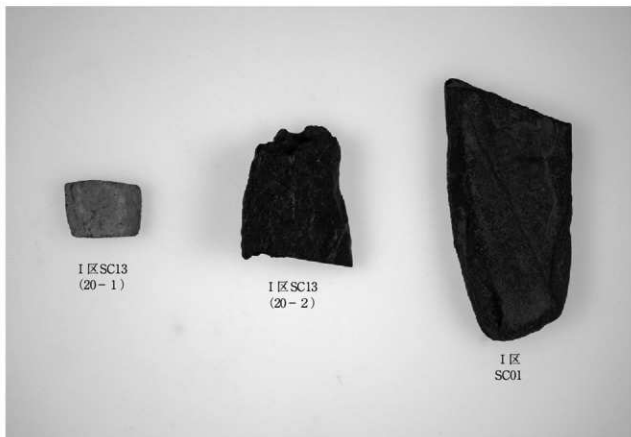
Ⅱ区SC01 (写真のみ)



I区SC02 (写真のみ)

Ⅱ区2・3・4号土坑出土土器 各遺構出土石器

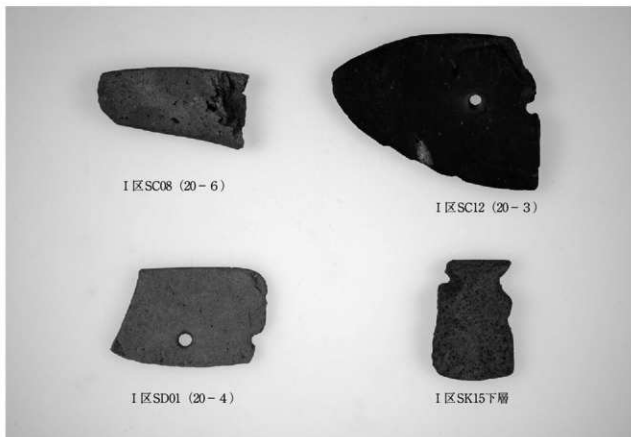




石製武器類



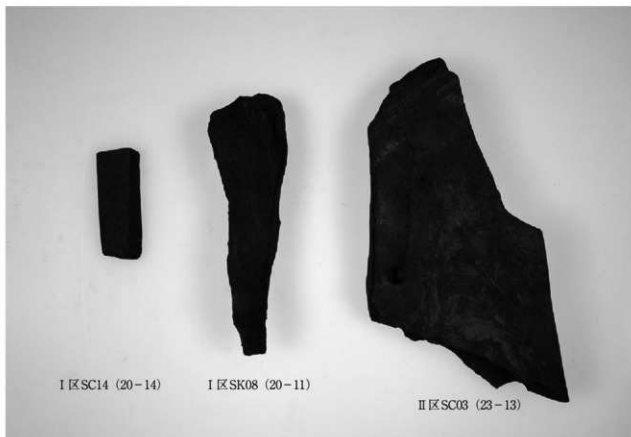
石斧類



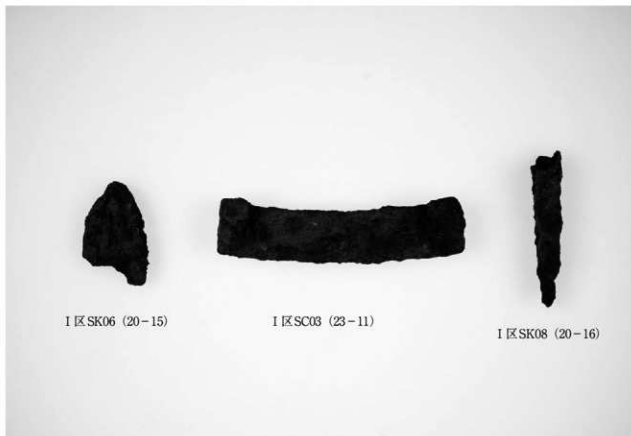
石製收穫具類



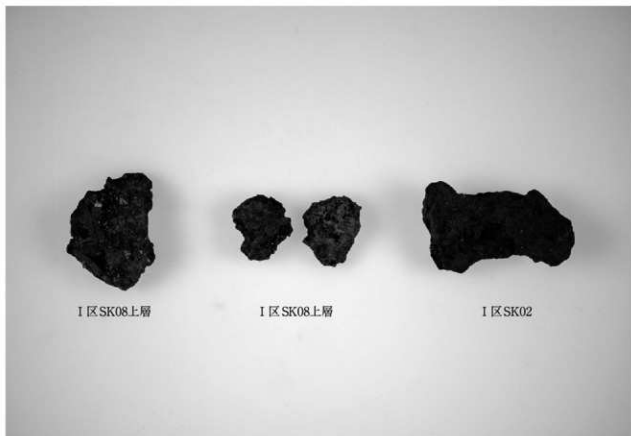
土製品



砥石各種



鉄製品



鉄滓

# 報告書抄録

ふりがな	つこひがしみやばるいせき							
書名	津古東宮原遺跡7							
副書名								
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第342集							
編著者名	山崎 頼人							
編集機関	小郡市教育委員会 小郡市埋蔵文化財調査センター							
所在位置	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5147-3 TEL0942-75-7555							
発行年月日	令和3年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つこひがしみやばる 津古東宮原 いせき 遺跡7	福岡県 おこむりし 小郡市 つこ 津古	40216		33° 44' 50"	130° 55' 65"	20190529 ～ 20191001	604.09㎡	宅地造成 (道路)
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
津古東宮原 遺跡7	集落	弥生 古墳 奈良		竪穴住居 土坑 溝		弥生土器 土師器 須恵器 石器・鉄器		
<p>本遺跡はこれまでに6次の調査を実施している。周辺でも確認されている弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が調査区近辺にも広がりを持っていることが分かった。また、住居自体は今回検出されていないが、奈良時代の廃棄土坑や溝からうかがえる集落が調査区近辺に広がる事が分かった。遺跡内には埋積谷があり、谷がある程度埋まった段階で、集落が広く展開するようである。</p>								

## 津古東宮原遺跡7

小郡市文化財調査報告書  
第342集

令和3年3月31日

発行 小郡市教育委員会  
小郡市小郡255-1

出版 アイフィールド有限公司  
小郡市祇園2-7-2

